OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

香川生物（Kagawa Seibutu）(28)：15－22，2001

新聞記事による香川県のウミガメ情報

末　広　喜代一

〒760-8522　高松市幸町１－１　香川大学教育学部生物学教室

吉　松　定　昭

〒761-0111　高松市屋島東町75-5　香川県水産試験場

Newspaper accounts of sea turtles in Kagawa Prefecture

Kiyokazu Suehiro, *Biological Laboratory, Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwaicho, Takamatsu 760-8522, Japan*

Sadaaki Yoshimatsu, *Kagawa Prefectural Fisheries Experimental Station, 75-5 Yashima-Higashimachi, Takamatsu 761-0111, Japan*

はじめに

平成11年度に環境庁の委託によって，香川県において「ウミガメ生息調査」を行った。既存文献等によりウミガメの上陸・産卵の状況を調査し，1970年以降に実績のある砂浜について環境調査を実施するというものであった。吉松がすでに収集していた戦前の「香川新報」のウミガメ記事，および1970年以降の「四国新聞」のウミガメ記事の収集による既存情報の調査を行ったが，上陸・産卵の実績があるという情報はえられなかった。しかしながら上陸・産卵の実績はなかったものの，香川県内の海域でウミガメが捕獲されたという記事が予想外に数多く見られた。また，この年には兵庫県明石市の海岸でアカウミガメが産卵孵化したという新聞記事（朝日新聞1999/10/18）が見られ，愛媛県松山市の重信川河口で産卵されたウミガメの卵を水族館が保護していたものが孵化したというテレビニュースを見た。これらのことから，香川県でも島嶼部で人知れずウミガメが上陸・産卵していることもあるのではないかと考えていた。ところが，2000年８月21日に小豆島在住の酒井宏氏より，小豆島の海岸でウミガメが産卵したという情報をえた。早速，日本ウミガメ協議会のホームページを調べてみると，同年７月８日21時30分頃に土庄町の海岸で産卵が行われたという記事が掲載されていた。このウミガメはアカウミガメで，８月31日に無事孵化したということが，９月２日に新聞やテレビニュースで報道された。このため，環境庁委託の調査で集めた新聞記事によるウミガメ情報の内容をここで紹介することによって，香川生物学会会員諸氏に対して今後の香川県でのウミガメ情報についての注意を喚起したい。

調査方法

香川県におけるウミガメについての情報は吉松が個人的に収集していた戦前の「香川新報」に掲載された香川県内のウミガメに関する記事のコピイおよび1970年（昭和45年）から1999年（平成11年）にかけての「四国新

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

聞」の香川県内のウミガメに関する記事を収集することによって行った。

吉松が個人的に収集していた戦前の「香川新報」(「四国新聞」の前身)のウミガメに関する記事のコピイは以前に吉松が香川県水産試験場の場史を作成する際に収集したものである。それをもとに戦前のウミガメ情報を整理した。

1970年から1999年のウミガメに関する情報は,「四国新聞」より関連する記事を探すことによって行った。1970年1月から1975年3月までの記事は,香川大学付属図書館所蔵の四国新聞より探した。1975年4月以降の記事は,香川県立図書館において作成されている四国新聞の切り抜きをスクラップした「四国新聞クリッピング」の「動物・植物」より探した。いずれの場合もウミガメに関する記事があれば,そのコピイを作成した。

今回の新聞記事情報は1892年(明治23年)から1939年(昭和14年)までの48年間と1970年から1999年までの30年間の新聞記事のみによっており,1940年から1969年までの30年間の情報は欠落している。これらの情報をえるには香川県立図書館所蔵のマイクロフィルムから探さなければならず,多大の労力を必要とするため,この期間の情報収集は行わなかった。

香川新報のウミガメ記事

戦前に発行された「香川新報」の記事からえられたウミガメ関連情報は以下の通りであった。いずれも記事の内容を要約してしめした。1892年(明治23年)から1939年(昭和14年)までの48年間に21件の記事があった。1件の新聞記事で複数のウミガメ情報がある場合もあり,同一情報にたいして複数の記事もあるが,平均して戦前期には2.2年に1回ウミガメに関する記事が掲載されている。単にウミガメが捕獲されただけでも新聞記事になることから,戦前期においても香川県ではウミガメは珍しい動物であったものと考えられる。

そのなかで,1895年(明治26年)8月8日の記事【3】は「砂中に半身をたてに埋めたる大亀あり」との記載があり,産卵しているものと思われる。しかしながら,産卵を確認しているわけではない。

ウミガメの種類については明治・大正期は単に大亀と書いているだけの記事ばかりで,写真もない。昭和期になると,1928年7月25日の記事【15】のアカウミガメ,1931年6月30日の記事【17】のタイマイ(鼈甲亀)とアオウミガメ,1933年6月30日【18】のオサガメ(写真より判断),1936年2月6日の記事【20】のアカウミガメ,と種名の記載がある記事が掲載される。種名の記載されていないウミガメは大部分がアカウミガメであると考えられるが,【8】のようにタイマイである可能性が高い記事もある。

【1】1892(M23)/3/6

一昨日4日朝,高松市東浜大島屋の抱船頭,泉常吉が内町の沖合で,三尺余りの赤色をおびた甲の大亀を捕獲。一人の男がその亀を借りて見せ物にしょうと昨日八栗寺に持っていったようである。

【2】1894(M25)/8/27

山田郡屋島と大島の間で,二畳敷の亀がいて,漁網をやぶるため漁業者等のあいだで銃殺する計画がある。

【3】1895(M26)/8/8

一昨日,高松市御旅所近辺のものが,香西の新斎の浜の砂中に大亀が半身を竪に埋めているのを発見した。大きさは箱車にようやく全身を入れるほど,頭は鯨尺で六寸ほど。箱車にのせて,市中を引き廻り大護寺等にて加持ののち,元の新斎に放した。

【4】1908(M41)/9/9

小豆郡豊島村家浦の安岐虎吉が去る2日午後八時頃,二里ほど沖合で漁業中に大亀を捕獲した。長さ3尺余り,量目二十五六貫。同業者に「そのようなものを捕らえては不漁の

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

もと」といわれて放した。

【5】1912(T 1)/12/20

備前赤磐郡日中町の橋本筆吉が本月4日漁業中，小豆島の東南約三里の沖合の水の子にて，重量35貫余り，身長直径4尺余り首周り2尺の大亀を捕獲した。吉瑞と持ち帰ったが，見物人が多く，京阪地方より買い受けんとするものもあったが，霊亀だからと売却せず，後日沖合に放し，亀供養する予定である。

【6】1913(T 2)/5/20

香川郡香西芝山西浦の沖合に大海亀が現れたのを捕獲した。体重十五貫，長さ4尺3寸5分。

【7】1913(T 3)/8/3

大川郡鶴羽村岡の堀井倉蔵が客月23日の午前十時頃，同村西町海岸にて，鰯網に長さ1丈余りの大亀がかかった。後日祟ってはいけないとただちに放したが，同じ亀が30分後に同地の浜垣基次郎の網にかかった。珍しいと付近のものに見せてから海中に放した。また，同日午後十時頃，大串岬の四町ほど沖合で長さ1丈位の海亀を見た。鶴羽で放した亀と同じ亀らしい。

【8】1915(T 4)/11/30

27日の夜，小豆郡坂手港海岸で武やり（金倉）辰五郎が黄金の亀を捕らえた。普通の石亀と変わることなく，縦5寸，横幅3寸くらいで，六角の亀甲は黄金をもって綴られ，首および肉皮部は金色の斑点があった。潮水で放養しているということである。

【9】1919(T 8)/7/18

16日午後7時すぎ，木田郡牟礼村房前沖のたて網のそばで，久保雄氏が大海亀を生け捕る。直径3尺で，重量18貫。一瑞兆と喜んでいたが，香具師等が譲り受けんと交渉しており，そのうち見せ物として世人の目に触れることになるだろう。

【10】1919(T 8)/10/2

大川郡相生村坂元海岸沖合の野網佐吉の大敷網に去る28日朝に大亀がかかる。体重百貫以上。酒を与えて放ったところ，沖合に去っていった。

【11】1920(T 9)/7/8

7月4日午後十時頃三豊郡高室九十九山沖海浜にて北野増造の地引き網に頭は一斗樽大，体躯七尺あまりの大海亀がかかった。体重は二百貫以上。漁師仲間では大亀が網に入るとその網は大漁するとの諺によって直ちに放した。

【12】1921(T10)/7/1

29日に小豆島坂手沖合で，潜水夫が長さ3尺幅2尺余り体重16貫の大亀を引き上げる。伊喜末に持ち帰り，酒を呑まして放つ予定。

【13】1923(T12)/10/2

29日午後4時頃，小豆郡土庄町小瀬の海岸へ幅5尺長さ7尺の大亀の死体が漂着。近在から見物人が詰めかけてにぎわっている。

【14】1928(S3)/7/24

木田郡古高松村新川沖で大海亀におそわれる。海岸まで追ってやっととらえた。重量は50貫，目玉はボール玉くらい。

【15】1928(S 3)/7/25

昨報の海亀は明善高女杉山教諭が鑑定してアカウミガメとわかる。甲羅の長さ3尺3寸横2尺5寸頭の長さを加えると5尺ほど。

【16】1930(S 5)/8/26

西讃観音寺町加茂田区の矢野多吉が8月23日に西讃豊浜町沖合で打ち瀬網に大海亀がかかった。丈が正味3尺5寸幅2尺5寸水掻きの幅4尺目方21貫。この地方では亀が網に入ると縁喜を祝うことになっているからたぶん放すだろう。写真あり。

【17】1931(S 6)/6/30

産卵期の関係か海亀が現れて漁業者を驚かす。数日前に丸亀市下田島？付近で畳2畳敷きの鼈甲亀が現れるのを見た。東讃でも海亀を捕獲した。仲多度郡佐柳島海面でも28日オスのアオウミガメを石本若松とせがれ清太郎が長崎鼻で捕った。当日2匹のアオウミガメを捕った。長さ一間幅5尺体重50貫。丸亀市に曳き帰ったが，見せ物にもならず，県立中

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

学校に寄付した。同校では標本とすべく解剖した。

【18】1933(S8)/7/18

16日大川郡鶴羽村岡ノ端の橋山總太郎が小豆島白浜沖で鰹流し網中に全身黒色の大亀がかかる。目方約百貫身長7尺甲の長さ5尺。今夏中，建田？松原の海水浴場で観覧せしめることになった。写真からオサガメと思われる。

【19】1935(S10)/7/21

18日午前3時頃小豆島淵崎村大谷浜の浜口善市が四海村葛島の海上で全身赤色の海亀を捕獲した。約24貫，長5尺余，幅3尺余。買人がいたが，捕獲者は金には目もくれず飼養中である。写真あり。

【20】1936(S11)/2/6

4日正午頃，綾歌郡王越村の青年浜崎正二くんが，同村能生海岸で1米くらいのアカウミガメを拾った。ただちに栗林動物園に寄付した。栗林動物園では一般に公開することになった。

【21】1939(S14)/12/29

三豊郡詫間村香田字波戸の池田三四郎さんが，志々島沖合で，27日午前4時頃，仲間2名とオオウミガメを捕獲。目方25貫位，長さ3尺まわり1丈。曳航して帰ったが，早朝から見物人で大混雑した。写真あり。

四国新聞のウミガメ記事

1970年から1999年までの30年間の「四国新聞」の記事からえられたウミガメ関連情報は以下の通りであった。いずれも記事の内容を要約してしめした。30年間で6件であった。上陸・産卵したという記事はなかった。1970年以降では5年に1回，ウミガメに関する記事が掲載されている。ウミガメの記事は1970年以降では明らかに減少している。

1972年6月2日の記事《2》のオサガメ，1976年9月10日の記事《3》のタイマイ以外は種名の記載がない。種名の記載されていないウミガメはアカウミガメであると考えられる。いずれの記事も写真が掲載されている。なお，2000年にも先に述べた小豆島でのウミガメの産卵・上陸および孵化の記事が掲載されているが，これについては省略した。

《1》1971(S46)/9/8

9月7日朝，豊浜町姫浜の豊浜港の堤防下でウミガメの死体が打ち上げられているのを子どもが見つけた。体長1.2メートル，体重は100キロ以上と見られる雌で，死後1週間以上たっていた。ウミガメの種類は不明。

《2》1972(S47)/6/2

6月1日朝，志度町鴨庄白方の中川孝雄さんが引田町沖の流し網にオサガメがかかった。甲長1.9メートル，巾1.8メートル，体重280キロ。船に積めず，ロープに結んで引っ張って帰ったが，途中で死亡した。午後から白方漁港で料理したところ，トロ箱2杯，百人分の肉が取れた。

《3》1976(S51)/9/10

8月26日に大内町三本松沖でタイマイが，同町三本松の中石次太郎さんのたて網にかかった。甲羅の長さ30センチメートル，体重4キロ。「なんとかエ付けして飼いたい」ということだが，エサを食べないようではベッコウ細工の運命をたどるかも。

《4》1987(S62)/9/30

9月28日午前4時頃，坂出市番の州沖で巨大なマダラトビエイが，同市瀬居町の島本薫さんの底引き網にかかった。記事中，エイを捕獲した島本さんは5月頃にも大ウミガメを網にかけたことがあり，「カメは大あばれしたので逃がした」と証言している。ウミガメの種類は不明。

《5》1993(H5)/1/8

1月7日，詫間町大浜港沖合1キロに仕掛けていた定置網にかかっているウミガメを，同町大浜の肥吾茂利さんが引き上げたが，すでに死んでいた。体長1.3メートル，体重60キロで甲羅にカキがついていることからかなりの年齢と見られる。ウミガメの種類は不明。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

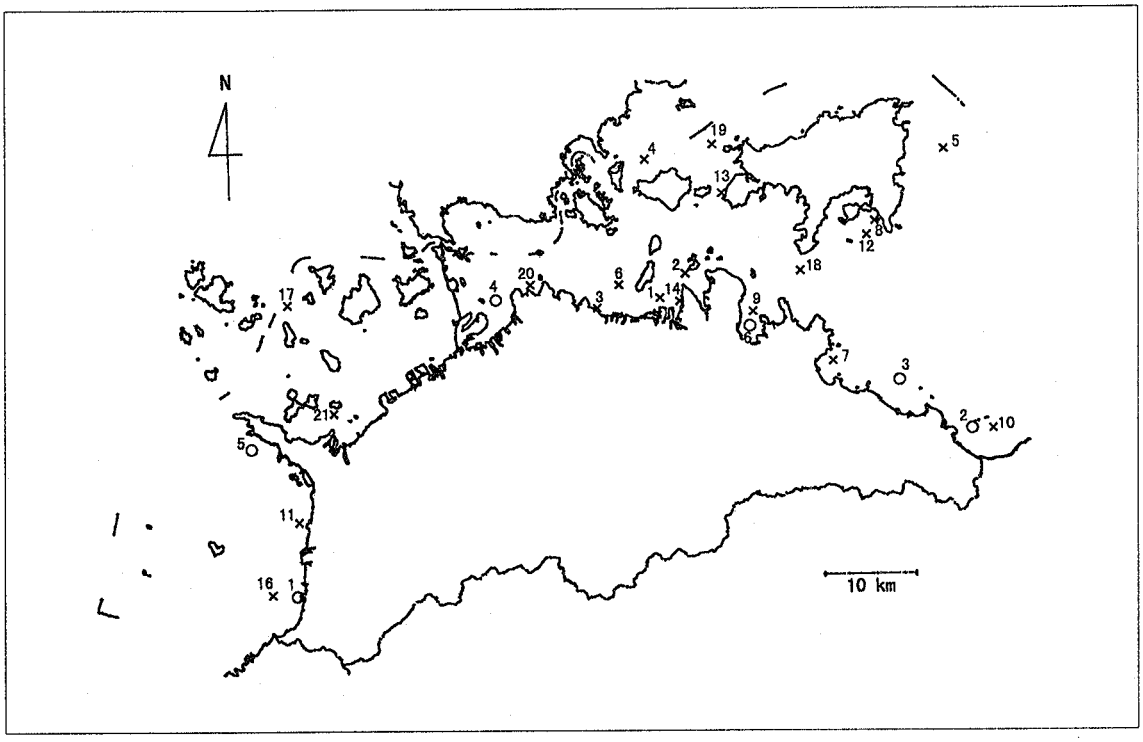

図１．新聞記事による香川県のウミガメ出現地点．
×は戦前期の，○は1970年～1999年の出現地点．
番号は本文中の参照番号に対応する．

詫間町に寄贈した。松田町長は「はく製にして“花と浦島太郎の里”に役立てたい」と話している。肥吾さんは「漁業五十年にして初めて。今年は縁起がいい」と喜んでいる。

ウミガメは昭和50年（1975年）頃に一度揚がって以来で，同町には，生きておれば酒を飲まして海へ帰し，死んでいた場合は供養して埋葬する風習が今に残っている。

《６》1999(H11)/10/13

牟礼町房前の小山敏夫さんの地引き網にオオウミガメがかかった。正確な採集日は不明。甲羅の長さ約90センチメートルで，おなかは黄色，甲羅には茶褐色の海草が生え，ツボガキが付着していた。水槽に放してやると気持ちよさそうに泳いでいたが動物保護の見地から海に放してやることにしている。記事ではオオウミガメとされているだけで，種類は不明。

ウミガメの出現場所

戦前期のウミガメ出現場所のおおよその位置を図１に×印でしめした。ただし，【17】の丸亀市下田島？と東讃は位置が不明なので省略した。【７】の記事は【６】の記事は同じウミガメのものであるので，これも省略した。1970年から1999年までの30年間の出現場所のおおよその位置を図１に○印でしめした。

出現場所は，【20】をふくめてそれより東を東讃，西を西讃とすると，東讃で20件，西讃で８件であった。【17】の丸亀市下田島？および東讃は，それぞれ西讃と東讃に入れた。明らかに東讃の方が多い。香川県近海には紀伊水道を通って瀬戸内海に入ってくるものと考えられる。また，戦前期においては高松周辺でもウミガメが見られたが，1970年以降では見られていない。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

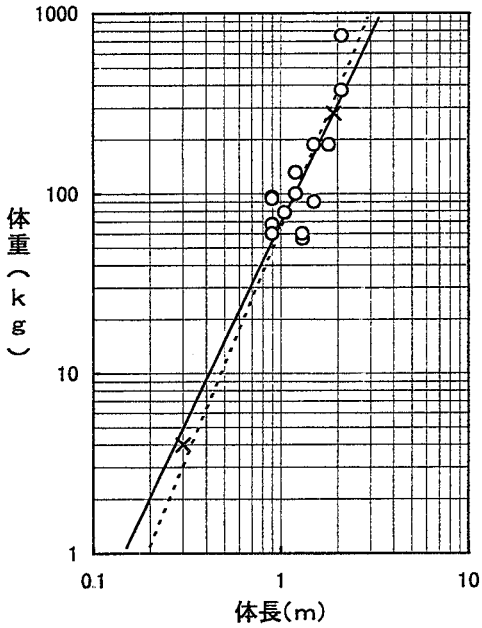

図2．新聞記事よりえられたウミガメの体長と体重の関係．×でしめしたのは甲長データー．実線は(1)式の関係を表す．破線は体長の0.75倍を甲長としたときの(3)式の関係を表す．

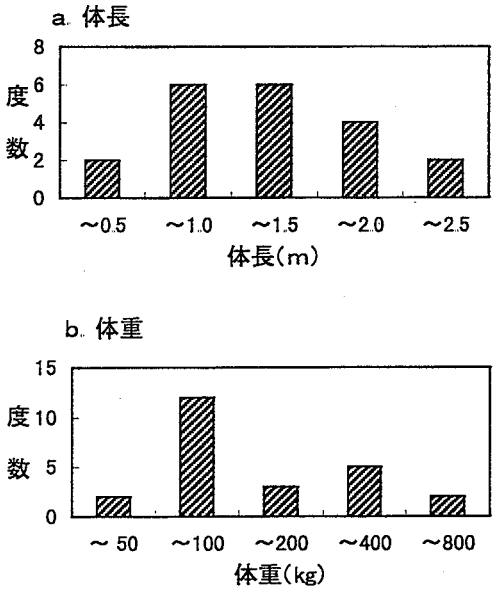

図3．新聞記事からえられたウミガメの体長と体重の度数分布．相対成長関係から推定した値を含む．

ウミガメの大きさ

多くの新聞記事にはウミガメのおおよその大きさが書かれている。体長だけしか書かれていないものも体重だけしか書かれていないものもある。体長は頭部まで含めたものか，甲長であるのか分からないものが多い。特に記載されてないものはいずれも頭部まで含めた体長であると考えて，体長と体重が記載されている16件の記事のデーターから体長と体重の相対成長関係を調べたのが，図2である。種の区別はしていない。図2のなかで，×印のデーターは甲長のみしか記載されていないため，甲長のデーターをもちいたものである。また，100貫以上等の記載のあるものは100貫とした。尺貫法のメートル法への換算にあたっては，1尺を30cm，1間を1.8m，1貫を3.75kgとした。体長（L）に対する体重（W）の相対成長関係は次式で表すことができた。

$$W=68.8L^{2.19} \qquad (1)$$

また，体重（W）に対する体長（L）の相対成長関係は次式で表すことができた。

$$L=0.200W^{0.387} \qquad (2)$$

いずれも，相関係数は0.920であった。(1)式の関係は図2にしめした。

長さのデーターのみの場合は(1)式，重さのデーターのみの場合は(2)式をもちいて，体重体長を推定した。それをもとに，24件のデーターの体長と体重の度数分布を作成したのが図3である。体重は2倍づつ増加するようにランク分けをしている。体長については1m前後，体重については50kgより重く100kg以下の個体が多い。オサガメ，タイマイ，アオウミガメと記載されているもの，推定されるものを除いて平均すると，体長1.39m，体重194kgとなる。

内田（1982）は徳島県阿南市の産卵場に上陸したアカウミガメ成体雌の甲長（X：cm）

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

体重（Y：kg）とのあいだに次式のような相対成長関係が成り立つことを報告している（相関係数：0.92）。

$$Y=0.0012X^{2.52} \qquad (3)$$

(3) 式の関係は甲長と体重の関係であるので，この関係をそのまま図２にしめすと，(1) 式の関係より長さに対する体重は重くなる。体長の値に0.75をかけたものをXとすると，図２に破線でしめすように，ほぼ今回のデーターに一致する。ただし，(3) 式の関係は両対数グラフ上で勾配がややきつくなる。新聞記事の体長データーはともかく，体重データーは実際に体重を測ったとも思えず，いいかげんのように思えるが，ほぼ妥当な値であると考えられる。

内田（1982）は阿南市での調査結果よりわが国の四国沿岸に産卵上陸するアカウミガメの甲長は，ほぼ90cmとしている。これを (3) 式に入れて計算すると，体重はほぼ101kgと推定される。体長の0.75倍を甲長とすれば，新聞記事よりえた体長の平均値139cmより甲長はほぼ104cmと推定され，妥当な値であると考えられる。

捕獲されたウミガメのその後の処置

ウミガメが生きたまま捕獲された場合にその後どのように処置されたのかということは興味深い。逃げたという例や，死体で発見された例，途中で死亡した例を除く21件の例では，放した（予定も含む）という例が最も多く９件（【3】，【4】，【5】，【7】，【10】，【11】，【12】，【16】，《6》），見せ物にする例が4件（【1】，【9】，【18】，【20】），飼育中という例が３件（【8】，【19】，《3》），標本にする例が１件（【17】），銃殺予定が１件（【2】），不明が３件（【6】，【14】，【21】）という内訳でる。

ウミガメが網にかかったことに対する漁業者の意識には相反する例が見られる。吉瑞である（【5】，【9】，【16】），大漁になる（【11】）と喜んで祝う一方で，不漁のもと（【4】），祟ってはいけない（【7】）と忌み嫌う例もある。いずれも戦前期の例であるが，いずれにせよウミガメが網にかかることが非常にめずらしいことによるものであると考えられる。

お わ り に

今回は新聞記事という限られた情報しか収集しなかったが，個人的な情報としては，小豆島でウミガメが孵化しているのを見た（立石清氏）とか，東讃の海岸で死体が漂着しているのを見た（大高裕幸氏，多田昭氏）という情報がある。このため，漁協等で聞き込み調査等を行えばより多くのウミガメ情報がえられるものと考えられる。過去の情報についての聞き込みデーターは年月日を特定するのが困難な場合が多いと予想されるが，今後の課題である。また，水産庁は平成９年（1997年）より「海亀の採捕等の実態調査」ということで都道府県に対してアンケート調査を行っている。それによれば，1999年に四海漁協と詫間漁協で１匹ずつ採捕されている（種名は不明，香川県水産課による）。今後，このようなデーターが蓄積されていくと，香川県海域でのウミガメ出現の実態が明らかになっていくものと思われる。

要　　約

戦前（1892年から1939年まで）の「香川新報」および1970年から1999年までの「四国新聞」の記事より香川県のウミガメに関する記事を収集した。その結果，1892年から1939年までの48年間に21件，1970年から1999年までの30年間に６件のウミガメに関する記事が見られた。１件を除いて，上陸・産卵したと見られる例はなかった。ウミガメの出現場所は東讃で20件，西讃で８件と，東讃の方が多かった。新聞記事に記載されたウミガメの体長と体重の間には相対成長の関係が成立し，体長の0.75倍を甲長とすると，アカウミガメ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

についてえられた内田（1982）の結果とほぼ一致した。生け捕られたウミガメのその後の処置として，放したのが９件，見せ物にしたのが４件，飼育中が３件，標本にしたのが１件，銃殺予定が１件，不明が３件であった。ウミガメが網にかかった漁業者の反応には，吉瑞と喜ぶ場合と忌み嫌う場合の相反する例があった。

引　用　文　献

（新聞記事については省略）

内田　至．1982．海ガメ学入門Ⅱ繁殖の生態．海洋と生物　23：402-410.